レーニンのケインズの引用

植民地国、敗戦国が、従属状態に陥っているだけではない。どの戦勝国の内部でも、いっそう鋭い矛盾が発展し、すべての資本主義的矛盾が激しくなった。これを、いくつかの実例で、簡単にしめしてみよう。

国債をとってみたまえ。われわれは、ヨーロッパの主要国家の負債が 1914 年から 1920 年までに、すくなくとも 7 倍にふえたことを知っている。とくに大きな意義をもつようになっている、もう一つの経済上の典拠をあげよう。それは、イギリスの外交官であり、『講和の経済的結果』という本の著者であるケインズである。彼は、自国政府の訓令をうけて、ヴェルサイユ講和会議に参加し、それを純ブルジョア的な立場から観察し、問題を地道にくわしく研究し、しかも経済学者として会議に参加した。彼は、革命家である共産主義者のどの結論よりも有力な、明確な、教訓に富む結論に達した。なぜなら、このかくれもないブルジョアが、ボリシェヴィズムの仮借ない反対者が、結論をくだしているからである。イギリスの素町人である彼は、ボリシェヴィズムをかたわな、狂暴な、残忍な姿にえがきだしている。ケインズは、ヴェルサイユ条約のヨーロッパと全世界が破産にむかってすすんでいるという結論に達した。ケインズは辞職した。彼はその著書を政府の鼻さきにたたきつけて、言った、君たちは無分別なことをやっている、と。

彼の数字をあげてみよう。それは、だいたいつぎのようになる。

重要国間の債務関係は、どのようになっていたか？　ポンド貨を金ルーブリに換算し、10 金ルーブリを 1 ポンドと計算しよう。そうすると、つぎのような結果となる。合衆国のもっている資産は 190 億ルーブリ、負債は零である。合衆国は戦前にはイギリスの債務国であった。同志レヴィが、1920 年 4 月 14 日のドイツ共産党の最近の大会での彼の報告のなかで、いま世界で自主的に行動している二つの強国、イギリスとアメリカがあとにのこったと述べたのは、正しかった。アメリカだけが金融状態で絶対に一本立ちをしている国となった。アメリカは戦前には債務国であったが、いまでは同国だけが債権国である。その残りの世界の国々はみな借金をしている。イギリスはその資産が 170 億ルーブリ、負債は 80 億ルーブリという状態に陥った。同国はすでに債務国の状態に陥っている。しかもイギリスの資産には、ロシアが借りている約 60 億ルーブリがはいっていた。戦争中にロシアがつくった武器弾薬がロシアの負債にふくまれている。つい最近、クラシンがロシア・ソヴェト政府の代表として、借款契約の一件について、たまたまロイドージョージと会談したとき、彼は、イギリスの学者、政治家、イギリス政府の首脳たちがロシアに貸した金の返済を期待しているなら、奇妙な思いちがいをしているのだということを、彼らに明瞭に説明した。この思いちがいこそ、すでにイギリス外交家ケインズがあきらかにしたものである。

もちろん、問題は、ロシアの革命政府が負債をはらいたくないという点だけにあるのではない。全然、その点にはない、と言ってもよいくらいである。どんな政府でもはらえないであろう。なぜなら、これらの負債は、すでに 20 倍も支払いずみになっているものを高利貸流に不足だとすることだからである。ロシアの革命運動にすこしも共鳴していない、このブルジョアのケインズ自身でさえ、「こういう負債を勘定にいれられないのはあたり

まえだ」と言っている。

フランスにかんしては、ケインズは同国の資産が 35 億ルーブリ、負債は 95 億ルーブリというような数字をあげている！　しかも、フランスは、フランス人自身が全世界の高利貸と呼んだ国である。なぜなら、フランスの「貯蓄」は膨大であり、植民地的および金融的な略奪がフランスの巨大な資本を構成し、何十億という金額を、とくにロシアに貸付ける可能性をあたえたからである。これらの借款からは膨大な収入がはいった。それにもかかわらず、また勝利したにもかかわらず、フランスは債務国の状態に陥った。

共産主義者の同志ブラウンが、その著書『だれが戦債を支払わなければならないか？』（ライプチヒ、1920 年）のなかであげている、あるアメリカのブルジョア的典拠は、国の財産にたいする負債の比率を、つぎのように見積っている。戦勝国のイギリスとフランスでは、負債は国の総財産の 50 %以上である。イタリアでは、この比率は 60 ― 70 %であり、ロシアでは 90 %である。だが、諸君も知っておられるように、われわれにはこの負債は苦にならない。なぜなら、われわれはケインズの本が出るすこしまえに、彼のすばらしい忠告にしたがった――いっさいの負債を棒引きした――からである。（**あらしのような拍手**）

ケインズは、このばあい俗物通有（？特有―青山）の奇妙な態度をさらけだしただけである。いっさいの負債を棒引きするよう勧告しながら、彼は、どのみちロシアからはなにもとることができないから、フランスがかえって得をすることはいうまでもなく、イギリスがたいして損をしないことはいうまでもないと述べている。アメリカも相当に損をしているが、ケインズはアメリカの「高潔な態度」に期待をよせている。この点で、われわれはケインズその他の小ブルジョア的平和主義者と意見がわかれる。われわれの考えでは、負債を棒引きするためには、彼らはなにかほかのことを待つべきであって、資本家諸君の［高潔な態度」に期待しないで、なにか別なことを目ざして働くべきである。

この簡単な数字そのものからだけでも、帝国主義戦争が戦勝国にとっても、耐えきれない状態をつくりだしたことがわかる。賃金と物価騰貴の大きな不釣合もこのことをしめしている。成長しつつある革命にたいして全世界のブルジョア的秩序を擁護しようとする機関、最高経済会議は、もちろん、労働者が資本の奴隷にとどまるだろうという条件つきで、秩序、労働の愛好、倹約の呼びかけを結びの言葉としている決議を、本年 3 月 8 日に採択した。連合国の機関、全世界の資本家の機関であるこの最高経済会議は、つぎのようなしめくくりをしている。

製品の価格はアメリカ合衆国では、平均して 120 %たかまったのに、賃金の上昇は同国ではわずかに 100 %であった。イギリスでは製品の価格は 170 %、賃金は 130 %、フランスでは製品の価格は 300 %、賃金は 200 %、日本では製品の価格は 130 %、賃金は 60 %であった（これは、さきにあげた同志ブラウンの小冊子のなかの数字と、1920 年 3 月 10 日付の『タイムス』紙上の最高経済会議の数字とを対比したものである）。

このような情勢のもとで、労働者の憤りがたかまり、革命的な気分と考えが増大し、自然発生的な大衆的ストライキの増大がまぬかれがたいことは、はっきりしている。なぜなら、労働者の状態が耐えられないものになっているからである。労働者は、資本家が戦争で測りしれないほどもうけ、支出と負債を労働者に肩がわりさせていることを、経験によって確信している。つい最近電報は、アメリカがわがロシアにさらに 500 名の共産主義者

を追放し、それによって「有害な煽動家」からまぬかれようとのぞんでいると知らせてきた。

アメリカが 500 名でなく、まるまる 5 万名のロシア人、アメリカ人、日本人、フランス人の「煽動家」をわれわれのところへ追放しても、事態はかわるものでない。なぜなら、どうにも手のくだしようのない物価のこの不釣合が元のままだからである。だが、どうにも手のくだしようがないのは、彼らのところで私的所有がこのうえなく厳重に保護されており、それが「神聖」だからである。このことをわすれてはならない。なぜなら、搾取者の私的所有制が破壊されているのはロシアだけだからである。資本家は、物価のこの不釣合にどうにも手のくだしようがなく、労働者は元のままの賃金では生きていくことができない。古い方法はなにをつかっても、この災厄(やく)にたいしては手のくだしようがなく、どんな個々のストライキも、議会闘争も、投票も手のくだしようがない。なぜなら、「私的所有は神聖であり」、資本家が多くの負債をためたために、全世界がひとかたまりの人間に隷属してしまったからである。ところが、労働者の生活条件は、ますます耐えられないものになっている。搾取者の「私的所有制」をなくすほかには、活路がないのである。

1920 年 2 月のわが『外務人民委員部通報』は、同志ラピンスキーの小冊子『イギリスと世界革命』からの貴重な抜萃を発表したが、ラピンスキーはこの小冊子のなかで、イギリスでは石炭の輸出価格が、産業界の権威筋の予想よりも二倍高くなったと述べている。

ランカシアでは、株価の値上がりは 400 %と見積られるまでになった。銀行の収益は最低 40 ― 50 %となっているが、このばあい、どの銀行家も、収益の獅子の分け前を、収益といわないで、賞与、社員配当などの名目でおおいかくして、秘密にしておくすべを心えているということを、さらに指摘しなければならない。だから、ここでも議論の余地のない経済的事実は、ごくわずかの人々の富がとうてい信じられないほどにふえ、前代未聞のぜいたくが際限がないと同時に、労働者階級の困窮がますますひどくなっていることを、しめしている。とくに指摘しなければならないのは、同志レヴィがさきにあげた報告できわめて明瞭に強調している、もう一つの事情である。それは貨幣価値の変動である。貨幣の価値は、債務、紙幣の発行などのために、どこでも低落した。さきにあげた同じブルジョア的な典拠、すなわち 1920 年 6 月 8 日付の最高経済会議の声明は、イギリスでは貨幣価値の低落がドルにくらべてほぼ 3 分の 1、フランスとイタリアでは 3 分の 2 だが、ドイツでは 96 %におよんでいると計算している。

この事実は世界資本主義経済の「しくみ」が、完全に崩壊しつつあることをしめしている。資本主義のもとで原料の取得と生産物の販路をささえている貿易関係を持続させていくことは、できなくなっている。多くの国を一つの国に従属させることをもとにして、貿易関係を持続させていくことは、貨幣価値が変動したため、不可能になている。もっとも富んだ国も、どれ一つ存立していくことができず、貿易をおこなうことができない。なぜなら、自国の生産物を売ることもできず、原料を手にいれることもできないからである。

こうして、あらゆる国を従属させ、もっとも富んでいる、当のアメリカが買うことも、売ることもできないという始末である。ヴェルサイユ会議のあらゆる経験をなめてきた、当のケインズが、不屈の決意で資本主義を擁護しようとしているにもかかわらず、またボリシェヴィズムを激しくにくんでいるにもかかわらず、その可能性がないことをみとめざるをえないのである。ついでに言えば、私は、共産主義的な檄、一般に革命的な檄のどれ

一つとして、ケインズの著書のなかでウィルソンと実践上の「ウィルソン主義」をえがいている個所に匹敵することができないとおもっている。ウィルソンはケインズや第二インタナショナル（それどころか「第二半」インタナショナル）の一連の英雄たちのような素町人と平和主義者の偶像であった。彼らはウィルソンの「一四ヵ条」を崇拝し、ウイルソン政策の「根源」について「学術」書さえ書き、ウィルソンが「社会平和」をすくい、搾取されるものと搾取するものとを和解させ、社会改良を実現するだろうと期待していた。ケインズは、ウィルソンがいかにもばかなことをはっきり暴露したが、すべてこれらの幻想は、クレマンソー氏やロイドージョージ氏に代表される資本の実利的な、功利的な、商人的な政策にふれるやいなや、消しとんでしまったのである。労働者大衆は、ウィルソン政策の「根源」が帰するところは、坊主流のたわごと、小ブルジョア的な空文句、階級闘争にたいするまったくの無理解にすぎないことを、その生活経験によって、いまではますますはっきりと見ているが、博学な物知りはケインズの著書によってそれがわかりそうなものである！

すべてこういうわけで、二つの事情、二つの根本的な情勢が出てくることは、まったく避けられないことであり、自然である。一方では、大衆の困窮と零落が、なによりも 12 億 5000 万の人々、すなわち地球の総人口の 70 %について前代未聞に増大した。これは、法律上の権利をもたない住民のいる植民地国、従属国のことであり、金融強盗に「委任統治権があたえられている」国のことである。なおそのほかに、敗戦国の奴隷状態を明文化したものにヴェルサイユ条約があり、ロシアを目標にしている秘密条約があるが、もっとも、これらの秘密条約は、われわれが何十億かを借りていることを記載した証書と同じぐらいの実際の効力はもっている。世界の歴史上はじめて、12 億 5000 万の人間にたいして略奪、奴隷状態、貧困、飢餓が法律的に明文化されたのである。

他方では、債権国となったどの国でも、労働者は耐えがたい状態に陥った。戦争はあらゆる資本主義的矛盾を、前代未聞に激しいものにした。そしてこの点に、きわめて深刻な革命的動揺が拡大していく源がある。なぜなら、戦争で、人々は軍律の条件のもとにおかれ、死にさらされるか、あるいはそれをおかせば即決の軍事裁判にかけられるかしたからである。戦争の諸条件は経済的現実を見るゆとりをあたえなかった。著作家、詩人、坊主、いっさいの出版物は戦争の讃美をこととしたにすぎない。戦争がおわったいま、暴露がはじまっている。ドイツ帝国主義とそのブレストーリトフスク講和が暴露された。ヴェルサイユ講和が暴露された。ヴェルサイユ講和は帝国主義の勝利となるはずであったのに、その敗北となった。ケインズの例は、とりわけ、ヨーロッパとアメリカの小ブルジョアジー、インテリゲンツィア、ほんのいくらか啓発され読み書きできる人々の何万何十万というものが、辞職して自国の政府の非をあばいた著書を、政府の鼻さきにたたきつけたケインズのあるいたこの道をあるかなければならなかったことをしめしている。ケインズは、「自国のための戦争」などという言い草がすべて徹頭徹尾欺瞞であること、結果において富をえたものはごくわずかの人だけで、残りのものは零落して、隷属状態に陥ったということを、何万何十万の人々がさとるとき、彼らの意識のなかにおこっていること、また将来おこることをしめした。ブルジョアのケインズが、自国の生活をすくい、イギリス経済をすくうには、イギリス人は、ドイツとロシアのあいだに自由な通商関係を再開することにつとめなければならないと言っているではないか！　どうすれば、それがうまくいくか？

ケインズが提案しているように、いっさいの負債を棒引きすることによってである！　これは、博学な経済学者ケインズだけの考えではない。何百万もの人々がこの考えに行きつこうとしているし、また将来行きつくであろう。何百万という人々は、負債を棒引きするほかに活路はない、だから「ボリシェヴィキ」（負債を棒引きした）「をのろってやれ」、アメリカの「高潔な態度」に訴えようではないか！！　とブルジョア経済学者たちが述べているのを聞いている。私は、ボリシェヴィズムのための、こうした煽動をする経済学者には、共産主義インタナショナルの大会を代表して、感謝の辞をおくるべきだとおもう。

一方では、大衆の経済状態が耐えがたくなり、他方では、絶大な力をもっている、ごく少数の戦勝国のあいだに、ケインズが例証している崩壊がはじまり、つよまっているとすれば、われわれは世界革命の二つの条件が現に増大しているのを見ているわけである。

第 31 巻『共産主義インタナショナル第二回大会』P210～217

1920 年 7 月 19 日～ 8 月 7 日

ポイント

ケインズは、ヴェルサイユ条約のヨーロッパと全世界が破産にむかってすすんでいるという結論に達した。ケインズは、いっさいの負債を棒引きするよう勧告した。ケインズは、ウィルソンがいかにもばかなことをはっきり暴露した。

ケインズは、「自国のための戦争」などという言い草がすべて徹頭徹尾欺瞞であること、結果において富をえたものはごくわずかの人だけで、残りのものは零落して、隷属状態に陥ったということを、何万何十万の人々がさとるとき、彼らの意識のなかにおこっていること、また将来おこることをしめした。ブルジョアのケインズが、自国の生活をすくい、イギリス経済をすくうには、イギリス人は、ドイツとロシアのあいだに自由な通商関係を再開することにつとめなければならないと言っているではないか！　ケインズが提案しているように、いっさいの負債を棒引きしなければならない。

注）**ウイルソン**、ウッドロー（1856 ― 1924 年）第三八代アメリカ大統領（1913 ～ 20 年）。民主党首。第一次大戦中、「十四ヵ条」の講和条件を発表し、国際連盟組織案を起草した。